

令和元年度第1回学校運営協議会 報告

【日時】 令和元年6月15日(土) 14:00~16:00

【場所】 本館1階 応接室

【参加者】

(学校運営協議会委員) 浅野 良一 委員(兵庫教育大学大学院学校教育研究科教授)
田中 隆夫 委員(観世流能楽師シテ方)
山口 裕稔 委員(槻の木高等学校PTA会長)
山口 善章 委員(高槻市立第一中学校校長)
山本 冬彦 委員(関西大学文学部教授)

(槻の木高校) 大西 雅美(校長)

(事務局員) 飯田 卓 (教頭)
河嶋 憲治(事務長)
山本 尚 (首席・学校運営室長)

(記録係) 川代 恵子(教諭)
矢野 祐子(教諭)

<開会>

<委員及び事務局員紹介>

<学校長挨拶>

高大接続改革の進行に伴い、英語4技能検定試験の活用を含めた大学入学共通テストに向けた準備、新しいカリキュラムへの移行、「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業作り等、教育界の革新の時期である事に加え、槻の木高校については、この数年で開校当時の事を知っている教員が減ってきているので、よい所を活かし、時代に合わせて進化していけるよう、今後もよりよい槻の木高校となるよう尽力していきたい。

<会長挨拶>

槻の木高校は17年目を迎えるが、まだまだ発展途上であるので、歴史を積み重ね、よりよい学校を作りたい。

<昨年度及び今年度の学校経営計画について> (校長)

学校経営計画における、槻の木高校の経営方針

- ・「高い志や倫理観と強い精神力を育て、学業と部活動・学校行事の両立のための支援と指導を行っていく。」「安全で安心して学校生活に取り組める環境を維持、発展させる。」という基本方針はこれまでと同様。
- ・平成30年度を踏まえて、令和元年度の学校経営計画を作成した。同じ方針で、十分にやってきているものについては、数字でなく内容で評価していきたい。数%の数字の上下はあることとして、考えていきたい。

プロジェクターを利用する等した新入試にむけた授業作り

- ・今年度「学校経営推進費」の支援校に決定し、予算を得ることができたので、全普通教室にプロジェクターの設置を予定している。学ぶ姿勢のある生徒に効果的な授業を提供できるよう、環境を整え、より良い学びにつなげる。それに伴い、3年後までの段階的な目標値を定め、学校経営計画に反映した。
- ・現2年生から大学入試が変更となるので、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業作りと生徒の育

成が直近の課題である。プロジェクターの設置から、効果的な授業作りまでを考えるプロジェクトチームを発足し、学校全体にこの流れが波及できるよう努める。

<学校経営計画を踏まえた取組みについて>（山本首席）

時代の変化に合わせた槻の木高校のめざす生徒像

- ・槻の木生は、基本的な生活習慣の確立に加え、授業、クラブなど、学校内での“日常”については、得意であるが、自ら考え行動し、学外で社会と積極的にかかわるなどの“非日常”を苦手とする生徒が多い。今起きている事を過去に予測できなかったように、数年後の未来はわからないので、変化に臆する事なく、立ち向かえる生徒の育成を目標としてかけ、今年で4年目をむかえる《Next Stage》の取組みを今後も続けたい。

《Next Stage》について

- ・費用面で難しいオーストラリア研修等の海外研修のすそ野を広げるべく昨年度、東京研修を始めた。
- ・初日の午前と2日目の午後は班毎の自由研修をさせたが、生徒自身が企画、実施し、生徒目線から様々な気づきをしていて、失敗する可能性があるとしても“線路をひかない取組み”をさせる大事さを改めて実感した。
- ・毎年同じ事ではなく、形を変えながら細く長くこのような取組みを続けたい。

今の槻の木生の様子

- ・どんな人になりたいか？と槻の木生に問うと、“人のためになれる人になりたい”という返答をする生徒が多数いる。真面目な生徒を尊敬する事ができ、真面目であることを肯定する強さを持っている。しかし、真面目だけでは社会では通用しない。社会の荒波に太刀打ちする事のできる、たくましい生徒をどのように育てていくかが今の課題である。
- ・《Next Stage》という質の高いキャリア教育を、充実した事前、事後指導と共に行い、生徒達の自信につなげたい。

《Next Stage》の本質とは

- ・“何を学ぶか”より“学校外での自主的な取組みに申し込んでみよう”という気持ちになることが一番の学びかもしれない。誰かに薦められてではなく、自らの意志で選ぶ生徒をもっと増やしたい。

<内部的な面での改革>（飯田教頭）

働き方改革

- ・現状：本校では超過勤務が多い。
4月…100時間超え 3名 80時間超え 11名
5月…100時間超え 3名 80時間超え 8名
昨年度…100時間越え 月1名程度
今年度、人事異動が多く、新たな仕事内容に取り組む教員が増えたことが一因ではないか。

今年度の改善への努力

- ・副担任制度によって業務を振り分ける。
- ・室の数を4から数を3つに減らした。質を落とさず超過勤務を減らしていきたい。

<質疑応答、意見>

(浅野委員)

備え付けの電子黒板のプロジェクターにすることのメリットは？

(矢野教諭)

- ・プロジェクターやパソコン、教材などを持っていく手間が省ける。
- ・現在学校にある備え付けではないプロジェクターも数が足りていないので、個人的にプロジェクターを購入している教員もいる。
- ・プロジェクターのセッティングに時間がかかり、授業が始まってからセッティングしていると生徒を待たせてしまう。

(大西校長)

- ・今後、使い方の研究や研修は必要で、昨年度に引き続き、先進校視察や校内研修を行っていく。

(山本委員)

- ・プロジェクターを自分で持って行って電子黒板を設置することは手間なので、最初からプロジェクターが設置されていることは、手間が省け、それだけでも教育効果は上がると考えられる。

(山口会長)

タッチペンなどを使うには、スクリーンがあった方がよいのでは？ 購入予定は？

(大西校長)

- ・現状では、スクリーンに映している教員と、黒板に映している教員がいる。今回スクリーンの予算は付いていないので、当面は黒板に映すことになる。スクリーンについては今後予算を確保する方法を考える必要がある。今回はプロジェクターを黒板の廊下側に映せるような設置方法を考えている。次の予算でスクリーンを付けること等を考えたい。

(山口会長)

インターフェイスボックスは入っているか？

- ・HDMIだけでなく、いろんな線をつなぐことができるインターフェイスボックスが黒板の下にあれば、接続が楽になる。

(河嶋事務長)

- ・Wi-Fiで電子黒板に繋げることができればと考えている。

(山口会長)

- ・ただし、ネット環境が必要となる。

(浅野委員)

中期計画で3年で国公立への進学2割にする目標について

- ・ 槻の木高校は国公立進学率が16パーセント後半で、はなかなか2割を超えられない。進学校では2割がボーダー、超進学校では3割が国公立に進学している。
- ・ 多くの高等学校がその傾向にあるが、特に槻の木高校は少品種・大量生産が得意な高校である。高度成長時代の日本の企業のようなものである。高度成長時代が終わってから日本の企業は、多品種・少量生産に移行したという点を考えると、槻の木高校の「日常を出て外にでる」という考え方は良いが、その非日常は計画されたもので、完全なる非日常とは言えない。大切な経験は「計画されていない外での経験」であり、それが真の意味での非日常と言える。高槻というフィールドをもっとうまく活用すべき。

(浅野委員)

働き方改革について

- ・ 槻の木はとにかくまじめにコツコツやる傾向にある。そろそろ自前主義から脱却し、外部委託などに置き換えて業務を減らすべきでは？

(山本首席)

- ・ 保護者、生徒を対象に市場調査した上でニーズのないものは精査し、切り替えていくことも必要である。
- ・ 槻の木を選んだ理由の一つには、「塾に行かなくてよい」という理由も上げられる。私立は、お金はかかるが塾に行かなくてよい。公立は授業料も安く部活もできるが、塾に行かずに進学を考えると厳しい面もあり、その公立と私立の間の存在が槻の木高校である。ただ、働き方改革が求められる中で何らかの形で移行していくことは必要である。国内留学プログラムは外部委託の一例である。

(浅野委員)

世の中のことを学ぶためにどんな取り組みをしているか。

(大西校長)

- ・ 「現代社会」ではもちろんのこと、家庭科の授業でも消費者の問題などについて学んでいる。

(山本首席)

- ・ 授業時数が足りず、教科書の内容をすすめることを優先している教員が多い。特に今年度は、10連休やG20で休みが多く、社会の動きについて学ぶ時間を取っている余裕がない。ロングホームルームは体育祭・文化祭の準備、科目選択等に割り当てている。

(山本委員)

生徒の生活の実態は？

(山本首席)

- ・ 槻の木高校のクラブ加入率は85パーセント程度である。槻の木高校の生徒は、アルバイトはしていない。当初はNEXT STAGEはクラブ活動をしていない生徒がターゲットであったが、最近では部活動と掛け持ちで参加する生徒も増加傾向にある。スマートフォンを使用している時間が長い生徒も少なくないと考えられる。

(浅野委員)

槻の木では教育的効果をあげるために携帯を授業でどのように使っていますか。

(山本首席)

- ・スマートフォンは全員が持っているわけではない。調べ合いはしている。

(大西校長)

- ・4月に、卒業生から3年生へ、3年生から2年生へ、2年生から1年生へというように、一つ下の後輩へのメッセージを載せたプリントが配られる。そこには、多くの上級生から下級生に向けて受験に向けて「脱スマホ」アドバイスが載せられている。生徒自らの力で「脱スマホ」ができるようになって欲しいという願いも込めて、プリントを作っている。生徒同士のメッセージというのは大変効果がある。また、2年生が修学旅行から帰ってきたら、受験は団体戦という掲示がされる。みんなで「脱スマホ」という雰囲気を作っている。

(山口会長)

- ・先輩から実際に話を聞ける機会があればよりいいですね。

(大西校長)

- ・先輩から直接話を聞ける機会と言えば、今本校には教育実習生が来ています。今日も土曜講習後「フラワーポットを植えるよう」「非常食のカレーを食べよう」というイベントを行いました。アルファ米にお湯を入れて、レトルトのカレーと食べるというもので、後援会や同窓会、実習生の方々が来てくれていた。生徒たちは、「クラブはたのしかったですか」など熱心に実習生に質問をしていた。

(山本委員)

Next Stage について

- ・先ほどのNEXT STAGEに関して、「非日常といっても管理されているのではないか」という疑問をクリアするにはどのようにしたらよいかを考えることは非常に興味深い。
- ・ある地域の活動ではスーパーにいった食材を買わせて、カレーを作るといった活動をさせている。失敗してもよいので、自分たちで考えさせるという取り組みをしている。また、ある民間の子ども会では遠くの県の無人島で暮らすという取り組みを行っていた。最寄り駅まで自分たちだけで切符を買って行き、現地に着けば、そこから現地の人々が船に乗せてくれる。子ども達だけでいったのだが、途中で迷ってしまい、何時間もロスしたということがあったそうだ。しかし、その活動に子どもの時に参加した学生が、それが自分の成長には、大変良かったといていた。では、高校生では何ができるのか。単なるイベントのほうがいいのか順番に積み上げていって、最後にオーストラリアに行ったほうがいいのか、そのあたりの流れの作り方についてアイディアや工夫ができるのではないか。そのあたりの見解は？

(山口委員)

- ・レールを敷くことで保護者は安心されるところがあります。あまり自由にさせすぎると事故が起こってしまいかねません。家族と学校以外の大人との触れ合い、出会いという面では大きなヒントをもらっていると思います。

(山本首席)

- ・全く会ったことのない新しい人との触れあいという意味では非日常を作り出せる。
- ・こちらにも安全装置が働いてしまうので、全体的なパッケージ感はぬぐい切れない。自分たちの負担も軽くしたいというもある。東京研修も現地集合できないか検討してみたが、負担がおおきすぎるので京都集合にした。自由の利く組織体ではなく、公立高校なので難しい面もあるが、生徒も自由のきくものは希望しているので、手を変え品を変え、あまりルールが敷かれていない取り組みを考えていきたい。

(山本委員)

社会貢献・社会参画的プロジェクトができないか？

- ・例えば、小学生が本を集めて図書室に置くといったような取り組みがある。社会参画ができ、なおかつ社会の課題に気づくことができるような取り組みがよい。
- ・去年、小学校の教員免許を取得する課程で学んでいるゼミの学生が、子どもの貧困について論文を書きたいと言ったので、直接、そのような課題に取り組んでいる小学校に連れて行った。
- ・社会的な組織、例えばNPOなどとタイアップするのも、社会の仕組みが分かるという意味でよいのでは。

(山本委員)

国内留学プログラム

- ・アイデンティティやリーダーシップについて考えるなどは、どこまでの議論をするのでしょうか？
- ・オーストラリアにはヨーロッパ人や中国人、ベトナム人など様々な人種がいて、オーストラリア人にとってはアイデンティティを考えるとというのは日常的な議論になると考えられるが、日本人の子ども達はその議論に入ったらどうなるのだろうと興味をもった。

(書記 矢野)

- ・アイデンティティやリーダーシップについては見学していませんが、環境問題や日本と海外の大学のシステムについて見学しました。例えば、環境問題については、まずリーダーである外国人の学生が、自分の国における環境問題について話します。その後日本での環境問題、例えば水の問題や森林伐採の問題などをリストアップしていき、その中から一つのテーマを選びます、そして、その内容を英語で発表できるようリーダーである外国人の学生が中心となってみんなでまとめていきます。その後、紙芝居や劇など色々な方法で発表します。

<まとめ>

(田中委員)

- ・あいさつができ、規範意識がしっかりしている。こういう良い面は伸ばして行って欲しい。
- ・NEXT STAGE はまだぬるい面もあると思うので、その良さを十分に発揮して、卒業後たくましく生きる一つの糧として欲しい。

(浅野委員)

- ・NEXT STAGE は、メインステージなのかもしれない。なるべく教育成果を損なわず、生徒の安心・安全を確保でき、できるだけプログラム化されていることに気づかれないようなプログラムを考えていかなければならない。

(山口委員)

- 一番印象に残ったのは「脱スマホ」について、そして「どんな人になりになりたいか」という問いに生徒が「人の役に立ちたい」と答える生徒がたくさんいるということ。まず小中学生でも大事なことは、自分のことができること、その上で「人とつながる」「人の役に立つ」ということが大事である。今年度の取り組み内容にもあるように、「授業で自分の意見をまとめたり、発表する機会がある」というのも、今中学校で重要視していることで、「人と繋がりながら創造していく力」をつけるためのしかけ作りが重要となってくる。ICT をうまく活用しながら授業をしていくことが必要である。高槻第一中学校では3年前から備え付けプロジェクターが設置され、去年の秋から生徒用タブレットが43台導入されたが、まだあまりうまく活用できていないので、今後プロジェクトチームを中心にうまく活用できるようにしていきたい。

(山本委員)

- 今年は授業の見学にいけると思う。生徒と面談したり話し合える場があればと思うので、よいアイデアがあれば出していただきたい。

(山口会長)

- 学校経営計画の冒頭にもありますが、保護者としては、是非子どもに入らせたい、入らせてよかったという学校である。「挨拶ができる」「時間を守ることができる」などは是非継続していただきたい。ただ、「ルールがない」社会に出た時に大丈夫なのかという不安はあるので、人間として成長できるよう子ども達を育てていただきたい。

第2回日程

11月1日(金) 14時~16時

授業見学後、その協議会という流れ